

# 感染症発生動向調査委員会報告 12月

## 《今月のトピックス》

- インフルエンザ、Aソ連型が全区で流行中。咳エチケットを心がけましょう！  
(厚生労働省ポスター<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou01/pdf/01c.pdf>)
- ノロウイルスを含む感染性胃腸炎、集団発生もあり、引き続き注意を。
- 麻しん、散発が続く。小学校入学前のⅡ期の予防接種を確実に！  
1月から麻しん・風しんは全数報告、麻しんは24時間以内を目途に届出を。

### 【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:84 箇所、内科定点:55 箇所、眼科定点:15 箇所、性感染症定点:26 箇所、基幹(病院)定点:3 箇所の計 183 箇所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の 13 感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計 139 定点から報告されます。

平成19年11月19日から平成19年12月23日まで(平成19年第47週から第51週まで。ただし、性感染症については平成19年11月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

### 全数報告疾患

#### <腸チフス>

今年初めての報告がありました。推定感染経路は経口感染で、海外からの帰国者でした。

#### <レジオネラ症>

12月は2例と、4月以降毎月報告が続き、現時点での合計が28例と、すでに昨年の4倍になっています。全国でも、第51週までの累計は647例と、昨年の報告数を大きく超えています。

レジオネラ肺炎患者においては、循環式浴槽やジャグジーなどの入浴施設の利用を確認する事が必要です。

なお、衛生研究所では、原因究明のための喀痰検査や遺伝子検査を行っています。

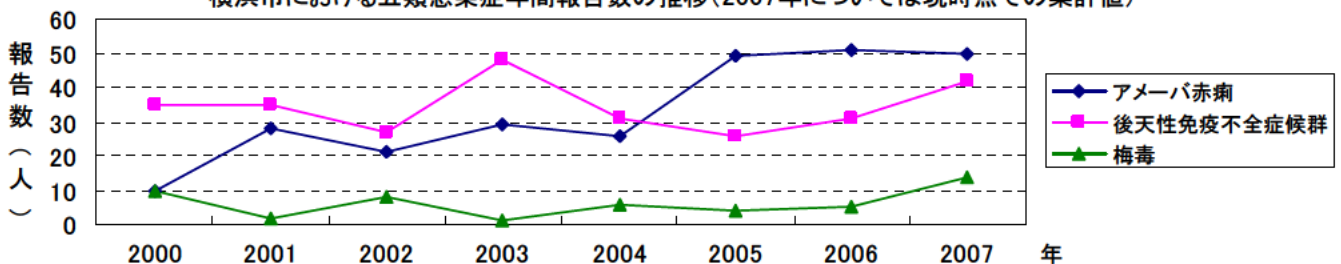
#### <後天性免疫不全症候群>

ほぼ毎月報告があり、12月は4例、全て男性で、同性間性的接触によるものが3例でした。性感染症と考えられているアメーバ赤痢、梅毒と合わせて、経年変化をグラフに示しました。

平成19年 週一月日対照表

週	日
第47週	11月19～25日
第48週	11月26～12月2日
第49週	12月3～9日
第50週	12月10～16日
第51週	12月17～23日

横浜市における五類感染症年間報告数の推移(2007年については現時点での集計値)



※ その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。

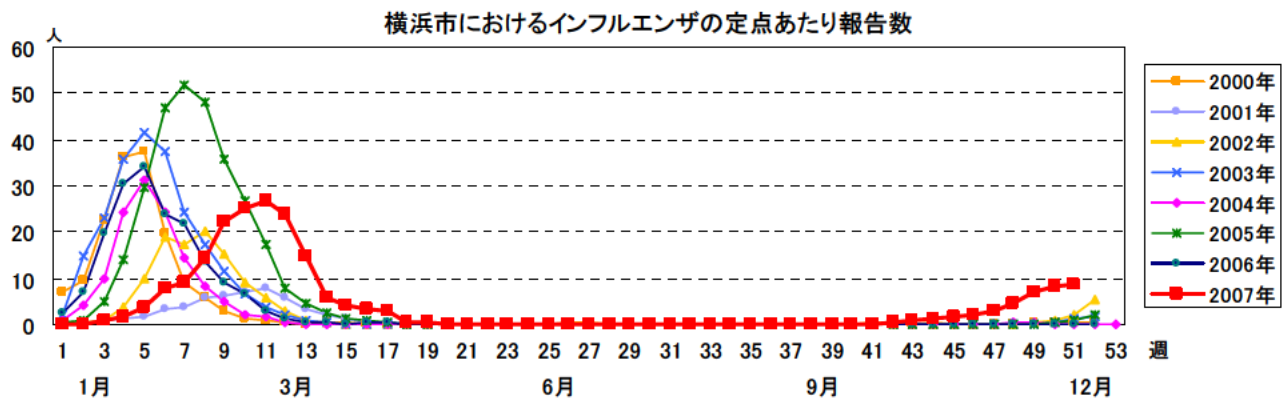
[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html#zensu](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu)

## 定点報告疾患

### <インフルエンザ>

横浜市では、過去10年間に比べて最も早い第44週に、近隣の都県に先がけて流行期に入りました。その後も増加が続き、第51週は定点あたり8.59で、すべての区で流行期に入っています。区別では、都筑15.0、磯子14.0、栄13.8、港北12.1、神奈川11.0、南11.0の6区で注意報レベルの「10」を超えています。また、川崎市は12.92、神奈川県(横浜、川崎を除く)は9.96と、横浜市より高めです。

横浜市内の病原体定点の検体からは、ここ数年間は大きな流行が見られなかったAソ連型が検出されています。これらは、今シーズンから使用されているワクチンと類似株とされていますが、最近の横浜市の検査結果では、抗原変異したウイルス株が増加しつつあるので、今後注意が必要です。最新の情報については、[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/sokuhou.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/sokuhou.pdf) をご覧ください。



### <感染性胃腸炎>

昨年の流行レベルには及ばないものの、11月後半から増加傾向が続いています。例年第50～51週にピークがありますが、今年も第50週が定点あたり17.79、51週は17.78と、横ばいになってきました。ただ、川崎市が23.19、神奈川県(横浜、川崎を除く)が24.82と、どちらも横浜より高く警報レベルを超えているので、注意が必要です。

病院、施設等における集団発生もあり、職員の健康管理についても、十分注意を払う必要があります。

### <RSウイルス感染症>

例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。昨シーズンは、過去3年間に比べてかなり多く報告されました。今年は、第47週に5人、48週に13人、49週に17人と徐々に増え、50週は急激に増えて33人の報告がありました。第51週は18人でした。引き続き、動向に注意が必要です。

### <A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

例年、春季を中心とした流行の後に夏季には大きく低下し、また冬季の流行に向かって増加します。今年も、第34週に最低値となった後、細かな増減はあるものの増加傾向が続き、第51週は定点あたり1.42と、昨年、一昨年並に多く報告されています。川崎市が3.06、神奈川県(横浜、川崎を除く)が2.33と、どちらも横浜より高くなっており、今後の動向に注意が必要です。

### <水痘>

例年、年末にかけて発生が増加します。今年も増加傾向が続いており、動向に注意が必要です。

### < 麻しん >

全国の小児科定点からの麻しんの患者報告数は、第43週は14人まで減少しましたが、その後また増加し、47週33人、48週43人、49週19人、50週33人と、報告が続いています。横浜市では、第48週に1人、49週に1人、50週に2人、51週に3人と、報告が続いています。予防接種歴については接種歴ありが1人、接種歴なしが3人で、残りは不明でした。予防接種のさらなる徹底が必要です。4月からの小学校入学に備え、1月～3月の間に、1期接種を確認する事が重要です。

麻しんに対しては、油断することなく、次の流行時に適切な対応がとれるように準備しておく事が大切です。

「麻しん(はしか)油断は禁物！」

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf)

#### 《麻しんの排除に向けて》

2006年度より、麻しん単独ワクチンの1回接種から、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種に変更。

2008年4月より5年間、中1及び高3相当の年齢への定期接種を実施。

2008年1月から、風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握。

### < 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。11月は特に大きな変化は見られていません。

#### 【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

#### 衛生研究所から

#### < ウイルス検査 >

2007年12月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点41件(鼻咽頭ぬぐい液)、内科定点12件(鼻咽頭ぬぐい液)、基幹定点7件(鼻咽頭ぬぐい液4件、髄液3件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎35人、発熱のみ4人、結膜炎1人、関節痛1人、内科定点は気道炎7人、関節痛5人、基幹定点は無菌性髄膜炎5人、急性小脳炎疑い1人、心筋炎1人でした。

1月10日現在、小児科定点の気道炎患者12人からインフルエンザウイルスAH1型、1人からインフルエンザウイルスAH1型とアデノウイルス2型、内科定点の気道炎患者2人、関節痛3人、頭痛1人からインフルエンザウイルスAH1型が分離されています。

これ以外に、PCR検査では、小児科定点の気道炎患者10人と発熱のみの患者1人からRSウイルスの遺伝子が検出されています。また、気道炎患者1人はインフルエンザAH1型が分離陽性でしたが、RSウイルス遺伝子も検出されました。

基幹定点は、無菌性髄膜炎患者2名の髄液からエコーウイルス30型とコクサッキーウイルスB5型のウイルス遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

#### < 細菌検査 >

12月の感染性胃腸炎関係の受付は10菌株で起因菌は検出されませんでした。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は2件でA群溶血性レンサ球菌が2件とも検出されました。